

## 「拓魂豊潤」

### 富山県南砺市・立野原開拓地

富山県の西部、砺波平野の南西端に位置する立野原(たてのがはら)は、戦時中、陸軍の軍事演習場だった。45(昭和20)年11月、約600<sup>㌠</sup>の旧・陸軍用地が戦後開拓地として払い下げられ、復員軍人や引揚者らで組織する立野原開拓団によって開墾が進められた。

立野原は県内でも入植者の多い戦後開拓地だった。広大で、南砺市福光地区(旧・西砺波郡福光町)と同城端地区(旧・東砺波郡城端町)にまたがっている。戦後開拓地は山間地が多かったが、立野原の北部はほぼ平坦で、南部も傾斜の緩い台地である。標高は平均190<sup>㌠</sup>。小渓流があるが、水量が少なく、土壌は強酸性だった。白山山系の急峻な山々に接しているので初雪が早く、融雪は遅いため、作物の作付けに制約を受けた。

立野原開拓農協が設立され、土地の配分や開墾作業、土壌改良、入植施設事業などを推進した。入植者は、酪農の導入、葉タバコや野菜の栽培などに取り組んだ。

現在は、ダイコン、タマネギ、サトイモなどの野菜やイチゴ、同市特産の「干し柿」用の柿が栽培されている。また、観光農業として、「イチゴ狩り」が行われている。

福光地区に、78(昭和53)年に建立された開拓記念碑がある。大きな記念碑で、碑銘は「拓魂豊潤」、揮毫者は「農林大臣 中川一郎」。隣の副碑には碑文が刻んである。

前段に「明治の後期から終戦までの四十数年間は立野原陸軍演習場に接収され 多くの集落が解村離村を余儀なくされた」とあり、先住者が立ち退きを求められ、移転に至ったことが判る。

続いて、「戦後一転して二百十世帯に及ぶ開拓団の入植地と変わったが しかしその艱難辛苦の開墾営農は言語を絶するものであった」「昭和四十二年念願の国営刀利ダムの完成により当地の用水源が確立し 先史以来の夢が遂に実現の運びとなった」と記されている。

## 立野原地区 拓魂豊潤碑

- ①所 在 富山県南砺市立野原西  
②設置年月日 昭和53年9月  
③設置者 立野原地区委員会  
④碑名 拓魂豊潤碑  
⑤碑文(表面) 県営農地開発事業立野原地区完工記念 拓魂豊潤  
農林大臣 中川一郎

⑥副碑(表面) 我々が生活の基盤として深い愛着をよせる「立野ヶ原」は今から約一萬五千年前先土器時代の人跡に始まり長い歴史と変遷に伴い極めて多難な道を辿ってきた 殊に明治の後期から終戦までの四十数年間は立野原陸軍演習場に接収され多くの集落が解村離村を余儀なくされた 戦後一転して二百十世帯に及ぶ開拓団の入植地と変ったがしかしその困難辛苦の開墾営農は言語を絶するものであった 昭和三十年台に入るとこの地域を含めた抜本的開発を指向する小矢部川総合開発計画が樹立なされこれに基づき昭和四十二年念願の刀利ダムの完成により当地の用水源が確立し先史以来の夢が遂に実現の運びとなった ここにおいて関係農家が総結集して一大決意を固め拓魂の機熟するにいたり 昭和四十四年県営総合農用地開発事業立野原地区として着手され以来幾多の困難を克服し長い歳月と巨費を投じて南砺を一望するこの高台に優良農用団地として新しい「立野原」が堂々完工した

偉大なる本事業の遂行にあたっては郷土の先覚松村謙三翁を始め諸先輩・農林水産省・富山県・福光町・城端町そして施工業者各位の献身的な尽力に対し深甚なる謝意を表するものである

この恩恵に支えられ全関係農家が一糸乱れぬ団結と互譲の精神を發揮してきた偉業を讃え無窮の繁栄を祈念するものである

昭和五十三年九月

小矢部川上流用水土地改良区

立野原地区委員会

### 事業概要

- |           |                     |
|-----------|---------------------|
| 1. 総地区面積  | 五八五ヘクタール            |
| 1. 農地造成面積 | 四四二ヘクタール            |
| 1. 総事業費   | 三拾二億一仟萬円            |
| 1. 工事期間   | 着工 昭和四十五年 完工 昭和五十三年 |
| 1. 関係組合員数 | 八七六名                |

⑦現在の状況 植栽に囲まれ綺麗に管理されている。



